人間形成の社会的基礎（その1）

井　深　雄　二
人文社会教室
（1990年9月1日受理）

Social Foundation of Human Molding (1)

Yuji IBUKA
Department of Humanities

The aim of this paper is to examine the methodology that is required to analyze various problems concerning human molding and education in modern society, through a theoretical study which pays special regard to the social foundation of human molding.

In order to discuss human molding, an analytical and structural grasp of the human concept is important. So, it is effective to set up categories called humanity (human nature), personality, and individuality.

Humanity is the category that shows the aspect of the natural existence of a human being. Personality is the category that shows the aspect of the social existence of a human being. Individuality is the category that shows the unification of humanity and personality.

序

本稿の課題は，人間形成の社会的基礎についての理論的考察を通して，「現代社会における人間形成と教育」をめぐる諸問題に対し，一定の方法論的示唆を与えることにある。

ここで，本研究の経緯に触れ，併せて本稿の構成について概説しておきたい。本研究の直接の契機となったのは，二宮厚美氏の論稿「経済学からみた人格と能力の発達」（『教育』1982，5）であった。この論稿は，経済学研究者たる二宮氏が，雑誌「教育」の求めに応じで，教育学と経済学との対話を深めるべく，当時教育学の分野で進められていた人格概念の理解をめぐる論争に関わって，ユニークな問題提起を行ったものである。しかしながら，筆者の知る限り，この二宮氏の問題提起に対する教育学の側からの本格的な返答は行われず，対話は必ずしも実を結ばなかったように思われる。その理由は，さし当たって二つほど挙げることができよう。第一に，教育学の分野において当時交わされていた人格論をめぐる方法論論争は，学力形成と人格形成との連関のメカニズムの解明や子どもの内面把握を通じての子どものまるごとの理解，といった問題関心に示されるように，子どもの個体的発達のレヴェルで進められていたのに対し，二宮氏の問題提起は，共同体論や協業論を介して人格論の社会的基礎を論ずるというように，人間の歴史的発達のレヴェルで行われたことである。従って，二宮氏の問題提起がユニークであればあるほど，教育学における人格論への接続に困難が伴われたと思われるのである。しかしながら，第二に，かかる困難は教育学が学際的な対話を試みる際には常につきまとうものであってみれば，より基本的には，人格論をめぐって教育学と経済学が対話を行うために必要な共通の基礎理論であるべき社会科学方法論に対し，教育学の側で必ずしも必要な準備ができていなかった，という事情があるように思われる。

以上のような問題意識から開始された本研究は，まず何よりも，社会科学方法論に対する一定の理解のものに展開されたと評価し得る人間形成論ないし人格論の内，本研究のベースとなるべき業績を確定しておくことが必要であるように思われた。その検討結果は，第Ⅰ章で人間形成論をめぐる若干の理論的諸問題としてまとめてある。次いで，第Ⅱ章で，本稿の主題である人開形成の社会的基礎を論じた。但し，あらかじめお断りしておけば，ここで展開するのは，あくまで最も抽象的なレヴェルでの理論的考察の結果に限られる。最後に，第Ⅱ章で確認された方法論上の見地に照らして，先述の二宮氏の論稿の検討を第Ⅲ章（次巻に予定）で行った。

Ⅰ．人間形成論をめぐる若干の理論的問題

1）宮原誠一氏の「形成と教育」

宮原誠一氏の論稿「教育の本質」は，人間形成にとって，社会生活こそが基礎的であることを明言し，いわゆる教育の再分肢論を展開した論稿として著名である。行

論に必要な限りでその内容を要約すれば，以下の通りである。

宮原氏によれば，教育の本質の理解において，「形成」と「教育」とを概念的に区別することが肝要であるとされる。即ち，氏は従来いわゆる「広義の教育」（人間形成に対して及ぼされる社会的環境の全ての影響を指す）と「狭義の教育」（学校教育）との区別が行われながら，両者の関連が問われず，実際の理論的展開においては「狭義の教育」だけが取り上げられてきたことを批判し，人間の形成の過程にはたらく力として，(1)社会的環境，(2)自然的環境，(3)個人の生得的素質，(4)教育の四つを措定した上で，前三者の影響の下に自然生長的に進行する人間形成の過程を「形成」と概念規定し，「教育」はこの「形成」の過程を目的意識的に統御する過程であるとした。そして，人間形成にとって，「形成」は諸個人の意識からは独立に進行しているところの基礎的過程であり，教育は「形成」にとってかわることはできないとした。

このような「形成」と「教育」の概念規定を試みた上で，宮原氏は「形成」過程にはたらく三つの力のうち，とりわけ社会的環境が規定的な力であることを指摘しつつ，「教育という社会の機能は，社会の他の基本的な機能と竝行する一つの基本的な機能ではなく，社会の基本的な機能の再分肢にほかならない」とする。従って，また，教育とは「政治の必要を，経済の必要を，あるいは文化の必要を，人間化し，主体化するための目的意識的な手続き」[1]にほかならないとされるのである。それ故，ここにおいて，われわれは，人間形成の社会的基礎として，政治生活，経済生活、文化生活といった社会生活それ自体を通して進行しているところの自然生長的な人間形成の過程を検討する必要性が示唆されているものと理解することができよう。

ところで，人間形成の社会的基礎として政治・経済・文化を措定した場合，これらの三者はいかなる構造を形成しているであろうか。この点について，宮原氏が，別稿「経済と教育」において，「精神的文化は，つまるところ，経済によって規定される」[2]としていたことからすれば，人間形成の社会的基礎としては，経済生活がとりわけ規定的であると見ていたものとして差し支えないであろう。しかしながら，氏は社会の基本的機能を政治，経済，文化に分類することの当否それ自体の判断を保留していたので，この問題に対する積極的な理論的展開は見られなかった。この点は，宮原氏が，当時においては，社会科学方法論とりわけ史的唯物論に対して相当に深い理解を持ちつつも，史的唯物論の諸範疇の厳密な使用の必要性を必ずしも認めていなかったように思われる点とも関係していよう。それ故，人間形成の社会的基礎の解明に必要な理論装置の整備の一層の進展は，教育の社会的機能と内容を史的唯物論の諸範疇を駆使して解明することを主題として展開されたいわゆる教育構造論争に待つことになるのである。

2）教育構造論争と小川太郎氏の人格・学力形成論

ここで，教育構造論争というのは，1950年代における教育科学論争の一環として今日評価されているところの，海後勝雄氏の問題提起（「資本主義社会の発展と教育上の諸法則」1954．5）を発端とする一連の論争を指すが，この論争自体については，別稿で詳しく論じたことがあるので[3]，本稿の課題に照らして，必要な限りでその主な論争点を要約しておくこととする。

論争の主題は，今日の時点から見れば，教育の社会的機能と内容の物質的基礎の解明にあったと言い得るが，「海後―矢川論争」に象徴される具体的な論争点の一つは，教育の社会的機能として範疇的に区別し得るところの労働力形成機能と世界観形成機能の相互関係においてどちらが規定的か，という点にあった。そして，そのことが，「土台―上部構造論」を前提に社会における教育の位置を問ういわゆる「教育上部構造論」と結びつけられ，労働力形成機能を規定的とする海後氏は，教育の物質的基礎としての生産力を強調し，教育は土台（＝生産諸関係）によって規定される上部構造には包摂され尽くさないとするのに対し，世界観の形成（ないし人格形成）機能を規定的とする矢川徳光氏は，教育の物質的基礎としての生産関係を強調し，教育は上部構造であるとしたのであった。

かかる論争点は，教育学における生産力理論（海後氏の場合）と生産関係理論（矢川氏の場合）の対抗を内包していたと考えられるのであるが，この論争を生産的なものにするためには，文字通り弁証法的論理，即ち両者の主張を，その一面性は批判しつつ，より高次な主張の諸契機として統一的に組み入れる論理を必要とした。それが生産力と生産関係の矛盾論と，この矛盾的統一を指示する範疇としての生産様式の定位であった。かかる見地は，論争の初期段階において，既に，柳久雄氏や小松周吉氏によって端緒的に示されていたが，論争を総括しつつ，これを説得的に展開し，かつ，人格・学力形成論の基礎理論として具体的成果を提示し得たのが，小川太郎氏であった。即ち，小川氏は，論争の総括を通して，「上部構造としての教育」は「生産様式（生産関係と生産力との矛盾的統一としての）によって規定」[4]されるとの方法論的見地を確立し，かかる見地から，教育の内部構造把握の端緒として，人格の形成と学力の形成の二側面を取り上げ，資本主義社会の下におけるその矛盾について解明を試みている。その場合，「人格の形成という側面は，人間の行為の態度・性格・信念・世界観の形成を

内容として，社会に対する態度の形成に関係し，学力の形成という側面は，実在を意識に反映してこれを支配するための知識・技能・能力・熟練の形成を内容とする[5]」とされるが，ここで，人格の形成が生産関係との，学力形成が生産力との，各々の範疇的関連が自覚されていたことはいうまでもないであろう。

そこで，改めて，小川氏の人格・学力形成論が，当面の課題である人間形成論に対して有する方法論上の意義を要約すれば，次の通りである。即ち，第一に，小川氏は，人格・学力形成の物質的基礎として生産様式を措定したが，このことは，経済こそが人間形成の基礎過程であることを示唆していることである。第二に，生きた人間の形成過程を分析する端緒として，生産力と生産関係という史的唯物論の基礎範疇との連携の下に学力の形成（より一般的にいえば能力の形成）と人格の形成という区別を措定したことである。以上の二点は，本稿が直接的に小川氏の業績から継承すべきことを自覚しているところである。しかしながら，小川氏の人格・学力形成論が人間形成論一般ではなく，教育の内部構造論として論じられたものであるという事情は別にしても，同氏の所論では，人格の形成と学力の形成の矛盾は指摘されているが，いわば生産様式範疇に相当するところの，両者の統一を指示する範疇設定と範疇編制の方法論を欠いている。そこで，次に，こうした論点に自覚的であると思われるところの，最近の人間形成論を次節で検討することとしたい。

3）那須野隆一氏の人間形成論

那須野氏は，教育科学論争において提起された方法論上の諸問題に関心を寄せ，その今日的継承・発展を自覚的に試みておられるか[6]，氏の論稿「教育における労働の意義」は，当面する課題にとって，とりわけ二つの点で注目される。

第一に，那須野氏が，人間的存在を表示する根元的な諸指標として，人間性・人格・個性という三つの基本的範疇を措定していることである。即ち，氏によれば，「人間性も人格と個性も，人間的存在（人間としてのありよう＝人間らしさ）を表示する根元的な諸指標もしくは諸特性として措定する[7]」ことが立論の前提である，とされ，人間労働の諸特質と関連づけつつ，人間性を「人間労働を媒介とする人間的自然と自然的人間との区別と関連，一般的にいえば人間と自然との区別と関連を指称する概念」として，人格を「人間労働……とりわけ人間独自の特質をもつ労働能力＝労働力……を媒介とする人間的動物と動物的人間との区別と関連，一般的にいえば人間と動物との区別と関連を表示する概念」として，個性を「人間労働とりわけ分業＝個性的受持労働を媒介とする人間的個性（人間一般としての個性）と個性的人間（個性そのものとしての諸個人）との区別と関連，一般的にいえば人間相互の区別と関連を意味する概念」として，各々規定している。いうまでもなく，人間的存在のあり様を示すために，人間性・人格・個性という範疇設定を行う試みは，那須野氏が初めてではない。例えば，著名な文献としては，第二次大戦後のわが国の教育に大きな影響を及ぼしたとされる「新教育指針」を例示することができよう。しかし，ここで注目したいのは，第一に，70年代から80年代にかけての教育学の領域において人格論が盛行し，人格範疇をもって人間的存在の全体性を表示するという傾向が見られた中で，那須野氏が人格を人間的存在の一側面を表示する範疇として措定するという分析的な視点を保持し続けていることである。勿論，この場合，那須野氏が，ある意味でオーソドックスな範疇設定の仕方を継承しつつも，独自の概念規定を試みていることは先に見た通りである。第二に，小川氏の人格・学力形成論との関係で言えば，小川氏に欠けていたところの，人間形成のあり様を統一的に示す範疇として，個性範疇が措定され，かつ生産様式論との連携の下にその理論的展開の行われるべきことが示唆されていることである。個性論が，現代教育改革論の一論点として取り上げられている今日，その科学的展開は，それ自体としても待望されるべきものと言えよう[8]。注目されるべき第二の点は，第一の点と関わるのであるが，那須野氏が人間性・人格・個性という範疇系列の編制の仕方に一貫した方法論の適用を試みていることである。即ち，氏によれば，「人間性・人格・個性という系列は，それらの相互の内的な区別と連関において措定されることにより，はじめて厳密な意味での範疇編制たりえる」ものとされ，そのばあい「人間性・人格・個性という範疇編制を可能にする一元的・構造的基軸は，人間労働の意義と役割」をおいては見あたらず，従って，氏の論稿では，人間性・人格・個性という範疇系列は，人間労働の内容・形態・様式のそれぞれに対応する人間的存在の特性として解析され，編制されているのである。ここで，内容・形態・様式という解析の方法論について，那須野氏は以下のように要約されている。

「一般的に内容・形態・様式とすすむ解析の順序は，範疇の＜上向過程＞，つまり抽象的な範疇から具体的な範疇への編制過程として捉えることができる。その意味では，第一に，人間性・人格・個性は羅列的な並列範疇もしくは対立範疇ではないこと，第二に，人間性・人格・個性は人間存在の特性をしめす抽象的な範疇から具体的な範疇へと展開される整合的な系列であること，第三に，それゆえ，個性範疇は人格範疇の意味内容を保持し，人格範疇は人間性範疇の意味内容を保持していること，以

上のことを留意しておきたい。[9]」

およそ以上のような那須野氏の所論は，その副題(「労働と人間性・人格・個性の形成と発達」）に示されているように，いわば労働過程論ないし労働様式論のレヴェルに焦点づけて人間形成の基礎過程を論じたものであり，かつ「試論」としてユニークな問題提起を行ったもので，その後の氏の見解の発展は当然予想されるところであるが，この論稿に限って本稿で継承・発展すべき論点を指摘すれば，以下の通りである。

第一に，人間的存在の諸特性を人間性・人格・個性という諸範疇で表示し，かつそれらの範疇設定・範疇編制を人間労働を基軸に行うという那須野氏の見地の継承を前提とした場合，人間性・人格・個性の形成の社会的基礎としてはどのような諸範疇が設定されるべきか，という問題が提起され得る。これまでの叙述からも容易に予想されるように，本稿では，生産力・生産関係・生産様式を人間性・人格・個性の形成の社会的基礎を指示する最も基礎的範疇として措定する。その場合，第一に，人間形成の基礎過程をなす生産労働は同時に人間社会の形成の基礎過程でもあること，第二に，社会構成体論においては，生産労働の物質的内容を表示する最も基礎的な範疇として生産力が，その社会的形態を表示する最も基礎的な範疇として生産関係が，生産力と生産関係の統一を表示する範疇として生産様式が，各々措定されること，以上の二点を前提にしていることはいうまでもない。

第二に，人間性・人格・個性の形成の社会的基礎を指示する範疇として，生産力・生産関係・生産様式といった諸範疇を措定した場合，これらの諸範疇の展開において，那須野氏によって提示されたところの，内容・形態・様式（統一）という系列で解析を進める方法論が適用され得る。ところで，一般に，社会現象の研究に適用される内容規定と形態規定は，生きた現実を対立物の統一として認識するための抽象的な分析概念であり，様式（統一）規定は，生きた現実を範疇的に再構成し，概念的に認識するための具体的な総合概念である，ということができるように思われる。この見地からすると，那須野氏が内容・形態・様式とすすむ解析の順序に関わって，「個性範疇は人格範疇の意味内容を保持し，人格範疇は人間性範疇の意味内容を保持している」とされている点は，再考を要する。即ち，形態規定の具体的内容は内容規定によって媒介されており，従って叙述においては，内容規定は形態規定より先に展開されなければならないが，概念内容から見れば，内容規定は形態を捨象した抽象であり，形態規定は内容を捨象した抽象であって，形態規定には内容規定の意味内容は保持されてはいない。それだからこそ，内容と形態をまとめて考察する様式(統一)規定が必要になるのである。それ故，本稿では，人格概念には人間性（素質・能力）は含まれない，との立場をとっている[10]。

1）宮原誠一「教育の本質」『宮原誠一教育論集』第一巻 1976 国土社 p, 23

2）宮原誠一「経済と教育」 同上 p. 29

3）拙稿「わが国における1950年代の教育科学論 1～3」『名古屋工業大学学報』第36巻～第38巻

4）小川太郎「教育科学論をめぐって」小川他編『戦後教育問題論争』1958 誠信書房 p. 31

5）小川太郎「教育と陶冶の理論」『小川大郎教育学著作集』第1巻 1979 青木書店 p. 19

6）那須野隆一「国民教育と生涯教育」『現代と思想』No. 17 1974. 9 参照。

7）那須野隆一「教育における労働の意義」『生活教育』No. 359 1978. 11 p. 20

8） なお，最近の著作としては，酒井博世『発達と教育の基礎理論』(1988 教育史料出版会）において，人間的発達の過程で獲得されるべき力が，能力・人格・個性の三つに範疇化されて論じられている点が注目される。

9）那須野隆一「教育における労働の意義」 p. 28

10） なお，かかる方法論上の問題点との関連で，那須野氏の人格概念も再検討されることが求められよう。

II．人間形成の社会的基礎

1）人間形成の物質的規定性

一般に，社会諸科学の究極の関心事は人間にあると言い得るが，わけても現代教育学は，全ての子ども・青年の諸能力の全面的発達と民主的人格の形成を通して，彼らの個性の全面的開花に導く可能性と必然性を自らの課題としている点で，その関心は直接的であると言えよう。

ところで，社会諸科学，従って教育学の対象としての人間は，さしあたって，生きた諸個人としてわれわれの眼前に現れる。しかし，与えられたものとしての生きた諸個人は，それ自体としては一つの混沌たる表象にすぎない。そこで，われわれが，この混沌たる表象から直接に現代子ども論ないし青年論等々を論じるならば，それは，現代の子ども・青年のあれこれの特徴の没概念的な展開に止どまらざるを得ないであろう。例えば，三無主義論，モラトリアム論等々は，それ自体としては現代の子ども・青年の特徴の一面を反映しており，その限りで一つの問題提起たり得るものであるが，しかし，これらはしばしば実践への展望を欠いたあれこれの解釈の域を出ないことが多い。

これに対して，問題の理論的かつ実践的な提起がなさ

れ得るためには，対象の全面的把握を必須とするのであるが，それはそれでまた，対象に即しての理論(方法論)を必要とするであろう。というのは，多様な諸性質を備えた生きた諸個人の全面的把握には，これらの諸性質の単なる寄せ集めによって到達し得るものではなく，一定の理論（方法論）によって媒介された分析と総合の積み重ねによってのみ接近し得ると考えられるからである。その意味で，生きた諸個人の全面的把握はまた構造的(諸範疇・諸編成）把握でもある。

以下において試みられるのは，生きた諸個人の全面的・構造的（諸範疇・諸編成）把握に迫るための理論（方法論）構築に関わる基礎的問題の一つであるところの，人間形成の物質的規定性の基礎的解明である。生きた諸個人は，その形成過程から見れば，人間の生活過程の所産である。ところで，人間の生活過程は，物質的生活の生産様式とそれによって規定される社会的・政治的・精神的生活過程一般とに区別され得る[1]。この内，物質的生活の生産様式は，人間生活の物質的基礎であると同時に，そのあり様は自然科学的な精密さで把握し得るところであって，それ故に，この物質的生活の生産様式によって規定される限りでの人間の形成過程の把握は，全問題解明の基礎であると言い得るであろう。本稿が，まずもってかかる課題を設定した所以である。

2）人間性と生産力

われわれが，実社会において生活している生きた諸個人を考察の対象とした場合直ちに明らかになることは，それが，自然的存在（自然界の一員）であると同時に社会的存在（人間社会の一員）であるという，二重の規定性を持っているということである。それ故，われわれの考察は，生きた諸個人としての人間を自然的存在と社会的存在とに分析することから始められる。

さて，自然的存在としての人間は，人間にとって所与の前提であるが，われわれにとって，その生物学的・解剖学的等々の諸特徴，要するに自然諸科学によって解明されつつあるような自然的人間の諸特徴それ自体は，当面の関心事ではない。われわれの関心事は，かかる自然的人間を人間的自然とするところの，即ち，人間を自然一般とりわけ動物から区別するところの諸特徴である。そして，かかる諸特徴の総体が，人間性に他ならない。

人間が動物から区別される諸特徴は多様であり得るが，人間自身は，生産労働を始めるや否や動物から自己を区別し始める[2]。A．ボルトマンによれば，人間の発生過程を他の動物から区別するところの独特の動物形態学的諸特徴は，直立姿勢，言語の使用，技術的行動様式等々に示される人間の存在様式（人間性）の洞察によってのみ合理的に説明され得るのであるが[3]，その人間の存在様式（人間性）を合理的に説明する鍵が生産労働に存していることは，史的唯物論の創始者たちが見事に解明していたところである[4]。

自然的存在としての人間にとって，労働は，自然と人間との物質代謝を媒介する人間特有の活動形態として永遠の自然必然性である[5]。人間は労働を通じて自然に働きかけ外的自然を変化させるが，そうすることによって，自分自身の自然をも変化させる[6]。人間性とは，まずもって，かかる過程の成果として，歴史的に生成しきたったものであり，また生成しつつあるものである。それ故，不変の人間性なるものは，一個の抽象物として以外には存在しないが，それは二重の意味でそうなのである。第一に，人間性の労働における定在は労働諸能力（精神的及び肉体的諸能力の総体)に他ならないが[7]，本能による束縛から自由であるところの人間労働は，従ってまた労働諸能力は，その本性において，無限の発達可能性を有しているということである[8]。第二に，労働を媒介として労働諸能力として顕在化されるところの人間性は，人間に内在するものとしては素質として把握されるのであるが，環境に受動的に適応することによって素質を能力に顕在化させる動物一般とは違って，環境を変革することを通じで素質を能力に転化させる人間にあっては，素質は個体の能力の発達を限界づける運命的要因ではなく，能力を獲得する可能性として，それ自体無限の可塑性を有していることである[9]。

人間労働の発展段階は，総括的には，労働対象，労働手段及び労働力を基本的構成要素とするところの生産力の発展段階として把握される。そして，生産力の発展段階は，何が生産されているかという点よりはむしろ如何に生産されているかによって区別される。換言すれば，労働手段の体系によって規定されるところの労働の効率性によって区別される。労働は，人間性の形成の推進的契機であるが，それ自体は，人間にとって自然必然性たることを止めない。これに対して，人間性の自由な発達は，この自然必然性の彼方にあるのであるが，それは，生産力の一定の発達段階において初めて実現可能性が与えられる。労働日の短縮は，その根本的な条件である[10]。

現代教育学がその実現を展望するところの，人間の諸能力の全面的発達の物質的基礎は，言うまでもなく現代資本主義が生み出したところの巨大な生産力に求められるのであるが，この点の原理的究明を深めるためには，一般に，人間性形成の社会的基礎（物質的基礎）として，生産力関連範疇を，それに限って措定することが要請されよう。

3）人格と生産関係

人間の自然的存在の側面を範疇的に示すのが人間性で

あった。これに対して，人間の社会的存在の側面を示す範疇が人格である。

生きた諸個人が行うところの労働は，それ自体としては，人間と自然との物質代謝を人間自身が媒介・規制・制御する行為であるが[11]，人間労働はまた本質的に協働であり，それ故，一定の歴史的に規定された社会の中での生産行為としてのみ実存する。この生産における人間と人間との社会的関係が，生産関係である。生産関係は，生産・分配・交換・消費を通じて社会的物質代謝を媒介・規制・制御する人間の行為に規定的目的＝推進的動機を与え，従ってまた，規則性と反復性を与える。かかる生産関係の担い手として把握された人間が，まずもって人格に他ならない。その意味で，この論理段階における人格とは，本質的には生産諸関係の人格化である[12]。

人格概念を理解する上で肝要な点は，範疇的には，生産関係が生産力を含まないように，人格は人間性(素質・能力)を含まないということである。この点はとりわけ，人格の実体をなす人格的力の本質把握にとって重要である。人格はしばしば諸個人に内的統一性を与える機能として理解されるのであるが，意志と意識を備えた人格の第一の機能は，実践的意識としての言語を媒介とする意志の交流によって，自他の人格の行為を媒介・規制・制御する点にある，と思われる。かかる力としての人格的力の発現が，人間の認識能力ないし精神的諸能力の一定の発達を前提にしていることは自明である。しかしながら，諸人格が社会的物質代謝において自他の行為を媒介・規制・制御する特定の仕方は，生産諸関係によって客観的に規定されている。即ち，人格的力の実体は，生産諸関係によって規定されるところの社会的力である。この場合，認識能力ないし精神的諸能力は，人格的力を発現させる媒介的契機にすぎない。以上の意味で，人格は，その本質において，社会的諸関係の総体である[13]。しかし，生きた諸個人の人格においては，この社会的諸関係が意識を介して彼の人格として結晶する過程は消し去られている。それ故，人格はあたかも人間性と同様に，彼の素質の顕在化として把握されがちなのであるが，人格の本質は，かかる見地からは絶対に理解し得ないのである。

さて，生産諸関係の総体は社会の経済的構造を形成するが，生産手段の私的所有によって特徴づけられる階級社会においては，生産関係は敵対的性格を持つことになり，これに規定されて敵対的な諸人格が形成されることになる。例えば，資本主義社会においては，諸人格は，資本家，賃労働者，地主等の階級的規定性を受け取る。他面では，資本主義的生産に先行するところの未発展な生産段階においては，諸個人は彼らが所属する共同体と臍の緒でつながっており，独立した人格としては現れない[14]。このような人格的依存関係によって特徴づけられる生産関係のもとでは，諸人格は人格性（人格的自由）をもたない。かかる人格性なき人格は，階級社会にあってはしばしば非人格として取り扱われるのであって，古代社会における奴隷や封建社会における農奴はかかる社会的存在であったといえよう。これに対して商品生産が行われる社会においては，そして商品生産の全面的展開は資本主義社会において初めて実現するのであるが，生産関係は人格的依存関係の解体の上に形成されるところの物的依存関係に基づく人格的に自由な関係によって特徴づけられる[15]。ドイツ古典哲学において理論化されたところの人格性（人格的自由）の担い手としての人格という近代の人格概念は[16]，その物質的基礎を，商品生産のかかる特徴に求めることができる。とはいえ，商品生産関係の担い手としての人格(商品生産者又は商品所有者)は，価値法則が競争を通してのみ貫徹されることに規定されて，絶えず競争に駆り立てられる。それのみではない。資本主義的商品生産にあっては，「二重の意味で自由な[17]」労働者の存在をその存立の根本的条件とするのであるが，彼らは労働力の売買を通じて，その労働を資本の下に包摂せられ，労働における彼らの人格性は剝奪される[18]。それ故，諸個人の人格的発展が互いの人格的発展の条件となるような真の人格的自由は，熾烈な階級闘争を通じての物的依存関係の廃棄と自由な人格的結合に基づく共同体の再建によってのみ，その十全な実現可能性が与えられるのである[19]。

現代教育学が展望するところの，自立から自律へ（人格性の確立），さらに自覚的規律へと向かう民主的人格の形成の物質的基礎は，以上の意味で，現代資本主義がもたらす古い共同体の解体と資本主義的（商品）生産関係の全面的展開に求められるのであるが，この点の原理的究明を深めるためには，一般に，人格形成の社会的基礎（物質的基礎）として生産関係関連諸範疇を，それに限って措定することが要請されよう。

4）個性と生産様式

これまでの考察において，人間は，生産力の担い手としては労働力（人間性）として現れ，生産関係の担い手としては人格として現れた。その場合，人間性の実体をなすのが，労働諸能力として発現されるところの人間自身の肉体に備わっている自然力であってみれば，人間性は生きた諸個人にとって歴史貫通的な内容規定であるということができる。これに対して，人格の実体をなす人格的力が純粋に社会的な力であってみれば，人格は生きた諸個人のとって歴史変遷的な形態規定であるといえよう。

ところで，生産関係は，生産力の発展水準に照応して

形成されると同時に，生産力の発現の仕方を制約する。この点に比すれば，人格は人間性の発達水準に照応して形成されると同時に，人間性の発現の仕方を制約するということができよう。かかる意味において，人間はその現実性においては，即ち生きた諸個人としては，人間性と人格の統一体である。そして，生きた諸個人を相互に区別するところの，各個人の本質的特徴が個性に他ならない。

諸個人が個性的であるのは，人間が自己意識を持つ自然存在として，意識的に自己を形成するからである。なるほど，動物も各個体はそれぞれ独自の諸特徴を有しており，相互に区別され得るが，それはもっぱら遺伝的要因か環境的要因によるところの個体差にすぎない。

個性の発達にとって規定的意義をもつのは，分業である。分業は，生産手段の私的所有が発生する以前においては，共同体的規制の下に置かれているところの社会的分業として現れる。とはいえ，そうであるのは，人間の欲望がまだ限られたものであり，従って自然発生的分業が未発展なまま骨化されていたからである。それ故，かかる歴史の発展段階では，内容的にも，形態的にも，個性形成の物質的条件は極めて未成熟である。私的所有に基づくところの商品生産と貨幣経済の発展は人間の普遍的欲望を呼び起こし，分業の発展を押し進める。だが，それは依然として自然発生的分業としてであり，そこにおいて諸個人は社会的生産物を私的に生産する。この場合，労働者が生産手段の私的所有者でもあるような条件のもとでは，個性の一定の自己充足的な発達が見られる[20]。しかし，その際，労働者は生産手段の所有者でもあることによって，特定の生産手段に縛りつけられており，個性の発達の条件をばあらかじめ指定されたものとして受け取るという狭隘さを免れ得ない。それ故，自然発生的分業の下における労働者がどんなに個性的に見えても，それは個性の自由な発達の結果ではない。

資本主義的商品生産の発展は，かかる個性の発展に新たな性格を付与する。ここでは，労働者は生産手段と生活手段から完全に切り離されており，それ故，自己の個性の発展を制限するような対象的諸条件から自由である。しかし，その対極において，生産手段は資本として労働者に対立させられており，労働者が労働するためには，労働力の売買を通して，資本としての生産手段に合体させられなければならない。かかる条件の下では，労働者の人格的自由は自らの労働力を売る自由にすぎず，労働における人格性は剝奪され，彼の労働内容，従って彼の諸能力の発達は，資本家によって指定されることとなる。それ故，資本主義的生産の下では，労働者の個性の発達は疎外され，資本の見地からは単なる個体差に落としめられる。他方では，資本の下への労働の包摂が進むに従って，資本主義に独自の生産様式が発展し，労働の社会化が進展させられる過程において，工場内分業が組織される。工場内分業は，計画的分業であるという点で，自然発生的な古い分業とは著しい対照をなすのであるが，剰余価値の生産を規定的目的＝推進的動機とするところのかかる分業にあっては，細分化された労側過程の下で，労働者の諸能力の一面的発達が強いられることとなる[21]。しかし，資本主義的生産様式の最高の発展段階である資本制機械＝大工業においては，労働者の諸能力の全体的発達をその死活問題たらしめ[22]，全面発達のための諸条件を準備するとともに，労働の社会的自己包摂を志向するところの労働者の階級的結合の物質的基礎を成熟させる[23]。

現代教育学が展望するところの個性の全面的開化の物質的基礎は，以上の意味で，資本制機械＝大工業の今日的展開に求められるのであるが，この点の原理的究明を深めるためには，分業の廃止という古典的命題との連携の下に，生産様式関連諸範疇を検討することが要請されるであろう。

1）「物質的生活の生産様式が，社会的，政治的および精神的生活過程一般を制約する。」
K．マルクス『経済学批判』1859『マルクス・エンゲルス全集』大月書店（以下，『全集』）第13巻　p. 6
この章での引用注について，最初に一言しておきたい。本章の意義は主題の理論的展開の仕方にある。それ故，個々の命題は，そのほとんどがよく知られた古典に依拠している。引用注は，それを補う意味で掲げてある。

2）「ひとは人間を意識によって，宗教によって，そのほか好きなものによって動物から区別することができる。人間自身は彼らの生活手段を生産しはじめるやいなや動物とは別のものになりはじめる。」
K．マルクス，F．エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』『全集』第3巻　p. 17

3）A．ポルトマン『人間はどこまで動物か』1944　高木正高訳　岩波新書　p. 80参照。

4）F．エンゲルス「猿が人間化するにあたっての労働の役割」『全集』第20巻　p. 482

5）「労働は，使用価値の形成者としては有用労働としては，人間の，すべての社会形態から独立した存在条件であり，人間と自然とのあいだの物質代謝を，したがって人間の生活を媒介するための，永遠の自然必然性である。」
K．マルクス『資本論』『全集』第23a巻　p. 58

6）「人間は，自然素材にたいして彼自身一つの自然力として相対する。彼は，自然素材を，彼自身の生活のために使用されうる形態で獲得するために，彼の

肉体にそなわる自然力，腕や脚，頭や手を動かす。人間は，この運動によって自分の外の自然に働きかけてそれを変化させ，そうすることによって同時に自分自身の自然〔天性〕を変化させる。」
同上　p. 234

7）「われわれが労働力または労働能力というのは，人間の肉体すなわち生きている人格（persönlighkeit）のうちに存在していて，彼がなんらかの種類の使用価値を生産するときにそのつど運動させるところの，肉体的および精神的諸能力の総体のことである。」
同上　p. 219

8）「労働の技術的過程は，人間性を無限に発展させるといいうる。」
芝田進午『人間性と人格の理論』1961　青木書店　p. 66

9）矢川徳光「子どもの発達と素質・能力・活動・人格」『講座　日本の教育3』1976　新日本出版　参照。

10）「じっさい，自由の国は，窮乏や外的な合目的性に迫られて労働するということがなくなったときに，はじめて始まるのである。つまり，それは，当然のこととして，本来の物質的生産の領域のかなたにあるのである。（中略）この国のかなたで，自己目的として認められる人間の力の発展が，真の自由の国が，始まるのであるが，しかし，それはただかの必然性の国をその基礎としてその上にのみ花を開くことができるのである。労働日の短縮こそは根本的条件である。」
『資本論』『全集』第25b巻　p. 1051

11）「労働は，まず第一に人間と自然とのあいだの一過程である。この過程で人間は自分と自然との物質代謝を自分自身の行為によって媒介し，規制し，制御するのである。」
『資本論』『全集』第23a巻　p. 234

12）「ここで人（Person）が問題にされるのは，ただ，彼らが経済的諸範疇の人格化であり，一定の階級関係や利害関係の担い手であるかぎりのことである。」
同上　p. 10

13）「人間的本質はなにも個々の個人に内在する抽象物ではない。その現実においてはそれは社会的諸関係の総和（ensemble）である。」
K．マルクス「フォイエルバッハについてのマルクス」『ドイツ・イデオロギー』古在由重訳　岩波文庫　p. 24
『全集』第3巻では人間的本質（Mennshen wehsen）が人間性と訳出されているが，本稿では，この点に関する訳語の問題は理論上決定的であるので，古在訳によった。

14）「人格的依存関係（最初はまったく自然生的）は最初の社会形態である。」
K．マルクス『経済学批判要綱』第一分冊　高木幸二郎監訳　1957　大月書店　p. 75

15）「物的依存性の上にきずかれた人格的独立性は，第二の大きな社会形態である。」
同上　p. 75

16）山本広太郎『差異とマルクス』1985　青本書店　序章を参照。

17）「自由というのは，二重の意味でそうなのであって，自由な人として自分の労働力を自分の商品として処分できるという意味と，他方では労働力のほかには商品として売るものをもっていなくて，自分の労働力の実現のために必要なすべての物から解き放たれており，すべての物から自由であるという意味で，自由なのである。」
『資本論』『全集』第23a巻　p. 221

18）「労働は労働者にとって外的なもの，つまり彼の本質に属さないものであり，（中略）。それゆえに労働者はやっと労働の外で自分の許に居るように感じ，そして労働のなかでは自分の外に居るように感じる。（中略）。それゆえに彼の労働は自由意志的なのではなくて，強いられたもの，強制労働である。」
K．マルクス「1844年の経済学・哲学手稿」　『全集』第40巻　p. 434

19）「労働の分割による人間的な力（関係）の物的なそれへの転化はこのことにかんする一般的観念を念頭から打ちはらうことによって元のようになくしうるものではなくて，ただ諸個人がこれらの物的な力を元どおり自分たちのもとに隷属させて労働の分割をやめにすることによってのみなくすことができる。これは人々の共同なしにはできない相談である。〔他人たちとの〕共同こそが〔各〕個人がその素質をあらゆる方向へ伸ばす方便なのである。したがって共同においてこそ人間的自由は可能となる。」
『ドイツ・イデオロギー』『全集』第3巻　p. 70

20）「労働者のこの用具所有は，手仕事〔Handwerks-arbeit〕としての工業労働の一発展形態を想定する。（中略）このばあい労働自体は，まだなかば技芸的であり，なかば自己目的である。（中略）中世の都市制度，労働はなお彼自身の労働である。一面的能力の一定の自足的発展，等。」
K．マルクス『直接的生産過程の諸結果』手島正毅訳　国民文庫　pp. 47—49

21）「単純な協業はだいたいにおいて個々人の労働様式を変化させないが，マニュファクチュアはそれを根

底から変革して，個人的労働力の根底をとらえる。それは労働者をゆがめて一つの奇形物にしてしまう。」

『資本論』『全集』第23a巻　p. 472

22）「大工業は，変転する資本の搾取欲求のために予備として保有され自由に利用されるみじめな労働者人口という奇怪事の代わりに，変転する労働要求のための人間の絶対的な利用可能性をもってくることを，すなわち，一つの社会的細部機能の担い手でしかない部分個人の代わりに，いろいろな社会的機能を自分のいろいろな活動様式としてかわるがわる行うような全体的に発達した個人をもってくることを，一つの生死の問題にする。」

同上　p. 634

23）那須野隆一「国民教育と生涯教育」p. 123参照。